

活動テーマ

大学がない町に集え!ヨコゼキャンパスコミュニティ

横瀬町全域地区 法政大学

1 活動目的

「大学のないまちで大学生が賑わい、地域と交流するまちづくり」を目的とし、法政大学谷本ゼミがコーディネーターとなり、既に横瀬で活動している立教大学や十文字学園女子大学と連携しながら横瀬町での大学生コミュニティ創出に取り組む。

2 活動地域の現状

高校・大学がない人口7700人ほどの埼玉県秩父郡横瀬町。15を超える町外大学がフィールドワークや包括連携協定、官民連携プラットフォームよこらぼを用いて横瀬町と関係性を持っている。その一方、各大学がそれぞれのタイミングで横瀬訪問し、それぞれ短期間でしか関わらないため、地域側のアテンドの負担増加、学生の継続的な横瀬での学習機会喪失に繋がっている。

3 活動内容

- ・横瀬と関わる大学生が集うオンラインコミュニティの立ち上げ・定期的な交流
- ・夏地域留学の実施
- ・横瀬町に関心のある学生の交流会・フィールドワーク
- ・春地域留学の実施

4 成果

- ① 横瀬に関わる大学生を中心とした若者コミュニティを創出する。

高校・大学がない横瀬町において、多様な大学を受け入れ、大学の垣根を超えた活動を展開するためのプラットフォームを生み出す。この1年間、既に横瀬町と関係を持つ立教大学や十文字学園女子大学といった大学の教員、学生と連携する中でゼミ単位での関係性を構築した。また、大学やゼミとしてではなく、個人として横瀬に来訪する、東京都や沖縄県、北海道といった全国各地の大学生を受け入れ、現地で3日～2週間活動したほか、横瀬町で活動する地域商社株式会社 ENgaWA の農業コミュニティに所属いただくことで、継続的な関係性構築に寄与した。

- ② 学生ののびのびとした自己実現の過程で横瀬町への貢献を図る。

大学やゼミ単位での活動に留まらず、継続的に横瀬に関わりたいと思う大学生を可視化し、地域側・学生同士で十分な連携が図れている環境を整備。彼ら自身に横瀬での継続的な関係構築にはどのような施策が必要か検討していただいた。また、本コミュニティに関心のある地域住民にご協力いただき、来年度以降、ENgaWA以外の学生を受け入れる窓口として、高齢者コミュニティや伝統芸能といった住民主体でまちづくりに取り組んでいる団体と連携する体制を図った。

5 課題

① 大学生の巻き込み

1 年はほぼゼミに所属していないため、横瀬と接触する機会が少なく、3 年以降になると就職活動等で地域での活動の優先度が下がってしまう。→地元の高 3 との接触機会増加や大 1 の段階での横瀬来訪を促し、継続的な関係性の構築に努める。大学卒業後にも関係性を継続できる関わりしろを作る。

② マネジメント・コーディネーター人材の不足

学生への教育コストに対して、地域側で得られる対価を何とするのか。この問いに対しての考え方が地域内でも三者三様であり、一枚岩ではない。関わるステークホルダー全体でこの問いに対する共通認識を持ち、地域側の受け入れ体制を今後充実化させていく必要がある。

6 次年度以降の計画

学生の「継続的にかかわり」を主軸に置いた活動

(ア) 大学やゼミ単位、または個人での横瀬来訪後、継続的に関わりたくなる関わりしろを用意。“志がないと横瀬にまた来られない”ではなく、観光客・研究学生・農業体験者・ゼミ合宿など様々な可能性があることを感じていただく。ヨコゼキャンパスコミュニティという大枠としてのプラットフォームがありつつ、サブコミュニティとして、様々な関わりしろで他大学生同士が再来訪できる施策を検討したい。

(イ) 制度や枠組みに囚われない再来訪要因を生み出す。「ふるさと支援隊」「ゼミでのフィールドワーク」「地域留学」「地域おこし協力隊インターン制度」といった、最初に横瀬と関わる機会は多数設けられているものの、自ら進んで 2 度目を踏み出す点でハードルの高さを感じる学生を多く目にしてきた。大学やゼミ、ないしは制度や枠組みを越えて再来訪し、継続的に関わりたくなる支援体制を検討したい。

【活動写真】



地域おこし協力隊へのインタビュー



農家訪問



ぶどう収穫



ぶどう販売会の企画・POP作成・実施



地域おこし協力隊の方との農作業



多大学を交えた学生交流会



横瀬の特産品の和紅茶
ヒアリング